

56

胎盤腫瘍の一例に就て

岡田 廉三

(臺北帝國大學醫學部産婦人科教室)

陳氏○、46歳2ヶ月、6回經産婦、家族歴には特記す可き事なし、既往症としては心臓疾患のみ、最終月経は12月15日であつた。妊娠第6ヶ月初め頃より心悸亢進、全身浮腫、腹部膨滿著しく、終に妊娠第7ヶ月初め死産した、兒は1500g、男性、假死後間もなく死亡せり。羊水は約5l、後産は15分後胎兒面を以て自然娩出す。

胎盤所見 畧圓形、大き $32 \times 32.5 \times 1.5$ cm、重き1917g、其胎兒面に兒頭大の腫瘍があり、腫瘍周囲には著しく怒張蛇行せる大小の血管が集まり、臍帯は中央部に附着し、長さ約45cmであつた。

腫瘍は畧球狀に胎盤胎兒面に膨出し、大き $12.5 \times 13 \times 8$ cm 表面滑澤、卵膜を以て被はれ帶紫赤褐色、硬さは硬弾力性、剖面は充實性、一般に赤褐色を示し中に所々稀く白味を帯びた部分があり、且つ結締織を以て大小に區分せられ殆んどモザイク様を呈してをり、基底部は肉眼的には比較的明瞭に他胎盤部分と分かれてゐるが、所々結締織が腫瘍内部へ入り込むのを認めることが出来た。

組織検査上は、腫瘍内部の赤褐色の部は Ravano¹⁾ の例の如く定型的の單純性血管腫像を呈し過度に増殖せる毛細血管が齜粗にして浮腫狀なる結締織を以て包裹せられ、大小の毛細血管塊を形成し、Frankl²⁾ の例の如く、かゝるものが幾つか更に集合して本腫瘍の分葉を形成してをり、各分葉間の結締織中には所々著しく擴大し、然かも管壁の強く肥厚した血管斷面を多數認めることが出来た。腫瘍の表面は羊膜を以て被はれ、薄い結締織層により腫瘍組織に移行してをるが腫瘍基底に近づくると管壁の肥厚し硬化せる大動靜脈の斷面を認めた。基底部の腫瘍表面にはデンチウム細胞層を認めることが出来、隣接した胎盤組織の絨毛基質は著しく浮腫狀を呈し、同時に一部のものには絨毛基質内に上述腫瘍の初期的變化と見る可き像を認め得た。

1) Ravano: in Halban-Seitz B. u. P. d. W. VI. 1. 309.

2) Frankl: *W. kl. W.* 1918. 28, Liepmanns Handb. d. Frauenhk. 1914.

考按及總括

John Clarke (Philosophical Transactions London 1798) の發表以來 Dienst³⁾, Bronstein⁴⁾ 等の報告があり我國に於ても緒方⁵⁾, 椿⁶⁾, 三林⁷⁾, 丸岡⁸⁾ 等約10例を見るのであるが、其頻度は Bronstein によると 2000 例に 1 例、丸岡によると 4286 例に 1 例と云ふのであるから可なり稀なものである。

腫瘍の大きさは余の調査した文献中のものは大なるものでも手拳大を超えてゐないのであるが、余の例は實に兒頭大に及んでゐるのであるから蓋し極めて稀有に屬する例と考へるのである。

本腫瘍は多く巨大胎盤及び羊水過多症を伴ふものではあるが本例の如く胎盤重量 1917g に及ぶものは稀であり、羊水量は 51 を超へてゐた。

本腫瘍の成因に關しては或は血行障礙説、或は炎症説等色々で尙不明の域を脱してゐない。余の例に就て考へるに母體に著明な心疾患があり、加ふるに 46 歳 2 ヶ月の初老婦であり、動脈硬化症の存在を否定し得ないとも考へられるから、Dienst の云つた如く是等の母體疾患が本腫瘍の發生にある役割を演じたと考へられ、母體の血行障礙が Graefenberg の説の如く、胎盤内絨毛間腔の血行障礙を招き更らに絨毛基質の浮腫、次で絨毛内毛細管の異常増殖となり以て本腫瘍を形成するに至つたと想像しても必ずしも不當ではない様である。

本腫瘍の存在は特別な場合以外妊娠中に診斷することは困難なもので總て分娩後に甬めて發見せられてゐる。臨床意義は少ないとする者もあるが屢々強出血、胎盤剝離困難等を見る事が報告されてをり、又死産、早産を來す事が多く、兒の死亡率の可なり高率である點を顧みる時は決して左様ではないと思ふ。

摺筆に臨み眞柄教授の御校閲と、武田學士の御助力に對し感謝の意を表す。

[詳細は日本婦人科學會雜誌に發表の豫定である。]

(受附：昭和 17 年 1 月 20 日)

- 3) Dienst: *Mon. f. Geb. u. Gyn.* 1904.
- 4) Bronstein: *Zt. f. Gyn.* 1936. 751.
- 5) 緒方: 東京醫事. 1461 號.
- 6) 椿: 日本婦. 第 12 卷, 7 號.
- 7) 三林: 近畿婦. 第 12 卷.
- 8) 丸岡: 日本婦. 第 32 卷.